編集後記

一九三八年（昭和一三年）一月に創刊された『一橋論叢』は、戦後の一時期を除いて月刊誌として刊行を続け、本号で第一三五巻第三号（通巻七八五号）を数えるに至った。「創刊の辞」において当時の学長上田貞次郎は「長文ノ研究報告ハ特殊ノ専門学者ニ資料ヲ提供スル所以ニシテ、学内一般ノ論壇トナルニ便ナラズ、別ニ月刊学術雑誌ノ刊行ヲ企テタル次第ナリ。」と記している。ここには狭く専門領域に閉じこもるのではなく、本誌を「社会科学の総合大学」に相応しい紀要にしたいという想いが現れている。事実、『一橋論叢』は、専門分野別の編集を行わず総合誌としての性格を保ち、その意味でユニークな大学紀要として一橋大学の顔となってきた。だが、学問の精緻化・専門化や学術誌に期待される役割の変化などから、一九八八年（昭和六三年）一一月号より部局毎に編集が行われる体制に移行し、現在では商学部号、経済学部号、法学部号、社会学部号、言語社会研究科号、人文・自然科学号、そして四月の「学問への招待」号および一〇月の特集号という構成を取っている。

しかし、学際的研究がますます重要性を増している中、多様な専門領域に渡る数多くの研究者を擁する本学の「知的・人的資源」をより有効に活用するには、社会科学の総合誌としての性格をあらためて問い直すことが必要である。そのため『一橋論叢』は七〇年近く続けてきた月刊誌という形式そのものをあらため、二〇〇六年度からはまったく新しい総合誌として再出発することになった。月刊誌として刊行される『一橋論叢』はこれが最後の号となる。

長く続いてきた伝統ある形式から離れることは大きな冒険だが、より優れた雑誌を作ることを目指し、改革を続けることが何よりも『一橋論叢』創刊の精神にふさわしい姿勢であろう。本誌を立ち上げ、育ててきた多くの人々に感謝するとともに、新『一橋論叢』が本学の研究成果を発信する場としてこれまで以上に高い水準の雑誌となることを期待したい。

二〇〇六年（平成一八年）三月

編集委員長　森村敏己